

2019年度事業計画		2019年度 事業報告	2019年度 評価	2019年度 改善	
最重点項目	「Stand in the Gap 破れ口にキリストの平和を」(コンセプト)の共有と展開	様々な機会に大学改革のコンセプトとして発信を続けた。ロゴやグッズを作成し、ブランディングに努めた	コンセプトは、学内外に浸透しつつある。ビジュアルブランディングと共に、イベントの企画により更に共有と展開を図れた	コンセプトの共感を生む施策を行う等して、2020年度の展開と発信に繋げる	
	教育と学生支援の改革立案と実行、学科再編と教員免許課程(宗教)準備	体制の構築、全学生に対する一貫した学生支援、学修成果の測定・評価方法の整備に着手した。全学で学科再編に取り組んだ。教員免許課程(宗教)は、学科再編後の検討課題とした	教育・学生の支援体制が構築の途上に進んだことは評価できる。外部アセスメントテストを導入したことは評価できる。学科再編を優先的に進めたことにより、教員免許課程(宗教)は後の検討課題となった	2021年度開始予定の新学科に向けて、2020年度も教育・学生支援体制の構築を進める。また、新学科が万全の体制で開始出来るよう備える	
	資金の収支の改善に向けた施策の立案と実行②	財務20年計画の2度目の更新を7月16日の理事会で承認した。主に、神プロⅢ群を中心に収支考察をし、学納金や人件費等主要な項目について今年度及び中期的な収入増、資金の有効活用のための支出削減の取組み・検討を行なった	保有資金額の減少に鑑み、賞与を減額する等依然厳しい状況に直面している。更新した財務20年計画において、中長期的人事計画については継続課題とした	30周年記念事業として寄付金募集の促進と、施設の改修後の効果を学生募集につなげる等財務の改善を進める。財務20年計画の継続課題に早急に取り組む	
	東京基督教大学創立30周年記念事業の開始	10月14日シオン祭をキックオフイベントとして記念事業が開始した。募金は、単年度の目標には届かなかったが、支援者数の増加等、順調にスタートした	学生と卒業生の賛同と協力を得て記念事業を開始できたことは評価できる。募金は、周年事業を動機とした大口の寄付をいただけたことは感謝である	11/3の創立記念日に向け、工夫しつつ事業を継続する。募金は、口数を増やすことと、大口を募るための活動を並行して継続していく	
1	EM(エンrollmentマネジメント)体制を構築する(A:キリスト教全人格教育(学修・学生生活支援))				
教育・学生支援	1 学務会議を学生・教育支援推進組織として整備する	臨時学務会議を何度も開催し学科再編における新カリキュラムの検討をし、学生支援の課題も繰り返し扱った	学務会議で学生支援の課題を扱ったことは評価できる	学務会議において、教務上の課題と併せて学生支援の課題が常に扱われることを定着させる	
	2 教授会における学生・教育支援審議を充実する	教授会にて、新しい小グループチャペルの形態について協議し、2021年度に向けて履修指導と学生支援を兼ねた担任制を検討することとなった	教育・学生支援担当で検討して来た企画を教授会で協議できたことは評価できる	カリキュラム再編に関する協議に多くの時間を割いたが、今後学生支援について教授会で協議する機会を増やすことを目指す	
	3 初年次・二年度、ミニストリー専攻長との教職協働体制を検討する	入学から卒業・就職に至るまで一貫したエンrollmentマネジメントを行うべきことを、教育・学生支援グループで自覚し検討した	学科再編後にエンrollmentマネジメントを実現すべきことを、教育・学生支援グループで共有したことは評価できる	2020年度の学務会議では、2021年度からエンrollmentマネジメントを実際にどう行うかの検討を行う必要がある	
全学生に対する統合的學生支援を実施する(A:キリスト教全人格教育(学修・学生生活支援))					
1	4 学科再編を見据えた信仰共同体、学びの共同体、生活共同体のあり方を検討する	学びの共同体の充実を盛り込んだ初年次向け新設科目「TCUスタンダード」の導入について、信仰共同体の充実を目指した新しい小グループチャペルの形態と、履修指導と学生支援を兼ねた担任制について具体的に協議した	教育・学生支援担当者や学務会議にて協議する中で、新しいプログラム開始に向けた課題が分かったことは評価できる	履修指導と学生支援のバランスが取れた学生支援体制と担任制を、部署間でのコミュニケーションをとりつつ学務会議にて調整していけるように見直す	
	5 学科再編を見据えて初年次提供科目を変更する	2021年度の学科再編を見据え初年次提供科目の大きな枠組みを確認した	初年次の各個別の提供科目については検討が行われたが、他の初年次科目との連携、2年次、専門科目との連携については課題が残る	初年次科目との連携、2年次、専門科目との連携について2020年度に集中的に検討する	
	6 入学前教育における学力の把握を実施する	入学前アンケートによる学習の姿勢を把握すると共に書く力を確認。また、入学後読解力テストを実施し日本語の読解力を定量的に評価した	外部の読解力テストと入学前アンケートの指標を使うことで支援が必要な学生を適切に把握することができた	外部の読解力テストは入学前に実施できないことから、次年度に向けて初年次に支援が必要な学生を適切に把握するために入学前アンケートの項目を見直す	
	7 プライバシーに配慮しつつ、コミュニケーションを促進する生活環境の改善を検討する	学生支援上、学生の個人情報プライバシーに配慮しつつ、必要に応じて共有した	学生支援において、重い課題ほど情報共有の必要とプライバシー保護とのジレンマがあることを理解した	学生個人の情報共有とプライバシー保護とのジレンマを教職員が自覚しつつ、学生支援に当たるよう注意する	
	8 学生の忙しさ軽減のため行事等の見直しを検討する	2020年度シオン祭の日程の変更を決定した	授業日数確保の課題と連動して、2020年度シオン祭の日程の変更を決めた。今後日程の変更により学生の負担が却って増えないよう、丁寧にコミュニケーションを取る	授業日数の確保と、行事における人格教育のバランスが取れた学年暦を作成できるよう体制を見直す	
	9 教会実習のフォローアップ体制を検討する	学科再編に伴い、教会実習を「クリスチャンライフフォーメーション」の科目に含めることを協議した。担当で今後の教会・学生とのコミュニケーションの在り方やフォローアップ体制について検討した	教会実習の担当職員が代わり、学生部で教会実習の課題と今後の対応について協議を開始できたことは評価する	学生・教会との教会実習の趣旨伝達やコミュニケーションの在り方、また課題を抱える学生への支援体制を見直す	
	全学生に対する統合的學生支援を実施する(A:キリスト教全人格教育(学修・学生生活支援))				
	全学生に対する統合的學生支援を実施する(A:キリスト教全人格教育(学修・学生生活支援))				
	全学生に対する統合的學生支援を実施する(A:キリスト教全人格教育(学修・学生生活支援))				

1 教育・学生支援	10	チャペル・祈祷会等のあり方を検討する	学科再編に伴い、チャペルを「クリスチャンライフフォーメーション」の科目に含めることを協議した。現行の小グループチャペルを見直し、学生の霊的形成・共同体形成に重点を置く形を検討している	学生の霊的形成のために相応しい支援について担当者及び学務会議にて協議し、課題を共有できたことは評価できる	学習と霊的形成の双方を支援できる担任制と小グループチャペルの在り方を、部署間でのコミュニケーションをとりつつ学務会議にて調整できるように体制を見直す
	11	学習支援体制を整備・充実する	初年次学習支援体制を整備し、読解力テストで基準に満たなかった学生に対して教職員が毎週課題を確認し、具体的な読み書きのサポートを行った。また、中間と学期末に支援内容を検討するための報告会を行なった	初年次学生を支援するためには定期的な個別支援だけでは限界がある	出欠や課題の提出状況を速やかに把握できる仕組みを構築し、初年次科目担当教員と連携可能な体制を整える
	12	大学院女子学生の支援を充実する	大学院女子学生の懇談会を春学期と秋学期に実施した	2回の懇談会により、大学院女子学生の交流や悩みの相談をする場を持つことができ、良い支援が提供できた	学生・教職員とも忙しく、冬学期は懇談会を実施できなかった。今後は余裕をもって計画する
	13	通学生支援を充実する	例年と同様の支援を実施した	例年同様の支援しか行えていないことは課題である	学生それぞれの必要に応えるため、アンケート等で状況を把握し、的確な支援を実施する
	14	学科再編を見据えて寮教育を見直す	学科再編に伴い、寮教育を「クリスチャンライフフォーメーション」の科目に含むことを協議した	寮教育が正課の科目の一部に組み込まれることになり、キリスト教人格教育が充実することが期待できる	今後の寮教育の方針、評価や支援の方法について十分な協議を進める
	15	障がい学生支援体制を拡充する	特に留学生で発達障がいの診断を受けている学生に対して学生相談室や学修支援室と連携し、チュータリングの提供、保護者を交えた定期的面談を実施した	短期留学生に関して情報収集とコミュニケーションに困難を覚えたが、概ね支援を必要とする学生に対してアセスメントと合理的配慮による適切な支援を提供したことは評価できる	発達障がいの診断を受けた短期留学生の増加への対応。上級生の発達障がい学生の支援など、寮主事の協力を得ながら行っているが、今後障がい学生の増加が予測されるため教学連携してチームでの支援体制を検討する
	16	学生教職員が協力して、学生の国籍を超えた支援と理解を深め合う事を促進する	サードカルチャーキッズの学生増加に伴い、専門家を招いて学生支援のための研修を実施した	研修を実施し、サードカルチャーキッズ学生支援に着手したことは評価できる	今後もサードカルチャーキッズの課題は増えると予想されるので、学びつつ有効な支援をしていく
	17	ACTS-ESライティングセンターを推進する	ACTS-ESライティングセンターによるACTS-ES生へのレポート・論文作成支援を実施した。ACTS-ESの科目を履修する日本人学生の利用もあった	学生がレポート作成の終盤に駆け込みで利用するケースが多く、レポートの構成段階からの一環した支援ができなかったことは課題である	ワークショップの開催などを通し、ライティングセンターへ認知度と利用の向上に取り組む。教員の需要とセンターの働きが一致するよう連携の強化を目指す
	18	ACTS-ES教務体制を整備・充実する	学生の興味や語学力に応じた履修ができるよう、複数の担当教職員による丁寧な履修指導を心がけた	複数のカリキュラムが併存しており、学生の自由度が増した一方で履修指導は複雑化している。関わる教職員の連携が一層求められる	履修指導を担当する複数の教員が同じレベルのカリキュラム理解を持ち指導ができるようにしていく
	19	学生支援に関わるFD・SDを実施する	8月に「教職員と学生をつなぐコミュニティ形成」のテーマで外部講師を招きワークショップを実施した。また、教育・学生支援グループでサードカルチャーキッズの学生支援をテーマとした勉強会、3月に学びのユニバーサルデザインをテーマに教授会でFDを実施した	学生支援をテーマに、現状の学生への対応、コミュニティ形成を意識したFD・SDを実施できた	FDの内容を学びで終わらせず、2020年度の改善につなげるため継続的な学びと実践の時間を計画する
カリキュラム改革を実施する (B:カリキュラム改革)					
	20	学科再編に向けて学部カリキュラムを整備する	文科省の事前相談結果伝達(10-12月)を経て2021年4月からのカリキュラムの骨子が固まった	数年に渡り検討を重ねてきた学科再編の骨子が固まったことは評価できる	2021年4月から始まる新学科の各科目と相互の科目との連携を有機的なものとすると同時に既にあるカリキュラムとの共存についてもよく検討し準備をする
	21	学科再編に向けて大学院カリキュラムを整備する	学部の学科再編に合わせて、大学院研究科の整備を行なうことを目標としていたが、特段の進展がなかった	数年に渡り学部学科の再編と併せて大学院のカリキュラムの整備について検討を続けていたが、まとまるまでには至らなかった	2020年度前半に2021年度に向けたカリキュラムの検討をまとめ、学生募集に繋げる
	22	学科再編に向けて教会音楽専攻科カリキュラムを整備する	学科再編の主旨と連携できるような授業形態と提供の方法を具体化した	教員間の連携が効率的に進み諸課題に対応できた。今後の入試方法や教授内容の見直しができる	募集に関して有効な方法、また提供内容を検討する
	23	ダブルディグリー・短期留学制度を充実する	提携しているバイオラ大学へのダブルディグリー希望者はいなかった	ここ数年、ダブルディグリー、短期留学(バイオラ大学)への参加学生がいなかったのは、課題である	参加学生がいらないことについてプログラムを含めて再検討する

1 教育・学生支援	24	ACTS-ESカリキュラムの日本語教育を充実する	実践的な言語教育と国際交流を目的に、日本語と英語の合同授業を行った。日本語多読のための図書を購入し、多聴のためのオーディオを制作した。科目“Advanced Japanese”等の中で、日本語能力試験を受験予定の学生を支援した。サポートが必要な学生のために、授業以外の個別指導を実践した	合同授業はこれまでと比べて増えたが、回数はまだ少ないことは課題である。日本語多読・多聴用の資料がだいぶ増え、貴重なリソースになりつつある事、日本語能力試験に挑戦している学生が増えている事、多様な日本語レベルの学生の必要に対応することができた事は評価できる	日本人学生と留学生に混ざる授業の機会を与え、その回数を増やす。日本語のオンライン素材の利用を更に促すため、学内のオンラインシステムを検討する	
	学修成果測定・評価方法を検討・実施する (B:カリキュラム改革)					
	25	学生情報システムを構築する	ウェブ出願システム導入は2021年度からの開始に延期となり、2020年度に一元的な学務システムの構築を行なうためのフレームワークを業者と共有した	ウェブシラバス、成績評価システム、学生カルテ、学修ポートフォリオを統合したシステムの構成を業者と共有できた	ウェブシラバス、成績管理等の構成をつめながら、先に学務に関するシステムに着手する	
	26	アクティブラーニングの取り組みを推進し環境を整備する	サポートが必要な学生のために、授業以外の個別指導を実践した	機器やサービスの実験を行ない、改善の糸口が見えてきた	次年度に向けて、アクティブラーニング教室に機器やサービスを導入し、クラスを運用しやすい環境づくりに着手する	
	27	授業改善に資する授業評価アンケートを実施する	例年通り、各学期に授業評価アンケートを行なった	回答者の割合が大幅に減少しているのが課題である	教授会等での教員への周知、オリエンテーションでの学生への周知を徹底する	
定員増加のための施策を検討・実施する (C:教育組織の拡充)						
2 学生募集	28	教員免許課程・資格取得コースの実施可否について検討を継続する	教員免許課程は学科再編後に再検討することにした。介護福祉士実務者研修は新カリキュラムにおいて学生に廉価で提供する事を決定した	介護福祉士実務者研修を学科再編後も活かせるようにしたことは評価できる	教員免許課程の可能性を長期的に検討する	
	29	通信教育の実施可否について調査する	2月の教会教職プログラムをライブ配信で行い、アンケートを実施した	ライブでの参加者は少なく、録画視聴の方が多かった。音声面の改善が必要だが、オンラインでの聴講を望む声が多かった	オンラインでのプログラムを提供する機会を増やし、アンケートを元に改善する	
	30	福祉学教育の方向性を決定する	2021年度から現行の介護福祉士養成課程の学生募集を停止を決めた	方向性を決定したことは評価できる	新カリキュラムでキリスト教福祉学専攻を希望する学生の募集に取り組む	
	1	説教や講演と共に教会の意見を聞く教会訪問を行う	4月に日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団を廣瀬理事長と山口学長が訪問し、同教団が支援団体に加入した	日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の支援団体加入は大きな成果であり、今後の学生募集につながる事が期待できる	30周年に向けて、より多くの関係諸団体と良好なコミュニケーションを図るための方策を計画する	
2	30周年に諸団体と協力して青年宣教の事業を企画する	韓国教会の学校見学1件、ACTS-ESニュースレター発行、同盟教団フロンティア2019で山口学長が講演、日本福音宣教会 (JEM) との包括協定締結、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の支援団体加入、クリスチャンキャンプカフェ実施、アフリカ5カ国への学生募集訪問を実施した。その他、日中韓のキリスト者青年大会参加者のTCUツアーが組まれたが新型コロナウイルス感染症対策のため中止となった	韓国の宣教団体であるJEMとの協定、所属教会数が多い日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の支援団体加入は大きな成果であり、今後の学生募集につながる事が期待できる。また、アフリカ5カ国に学生募集の訪問実施は留学生募集につながる事が期待できる	国外の教会・団体との協働の増加に備え、学内の体制を整える		
3	新規包括協定締結先をリストし関係性を構築する	hi-b. a. との包括協定を更新した。その他、JEM、日本国際飢餓対策機構、ワールド・ビジョン・ジャパン、株式会社創世ライフワークス社と新たに包括協定を締結した	hi-b. a. との協定更新は成果として挙げられる。その他の中高生・青年宣教団体との協定締結は進展しなかった	国内の中高生・青年宣教団体は数が限られており先方の事情もあるため、必ずしも協定締結という形にとらわれずに協働の実績を積み重ねることを目指す		
4	受験生のニーズにマッチしたオープンキャンパスを実施する	5/10-11, 6/15, 7/20, 8/24, 10/14, 11/4, 12/14, 1/18の8回のオープンキャンパス及び体験入学(随時)を実施し、137名の参加があった。オープンキャンパス及び体験入学の年間目標は180名であり、76%の達成率であった	目標は達成出来なかったが、昨年度 (125名) より多い参加者となった	2020年度は2021年度の学科再編という大きな変更があるため、その魅力をアピールしオープンキャンパス等の参加者増を目指す		
5	ウェブサイトを継続的に改善強化する	学生ブログ、日英両サイトリニューアルを実施した。資料請求者は114件 (内、教会教職は22件)。全体の資料請求者は昨年と比べ9件増えたが、教会教職対象者の資料請求は4件減じた	サイトリニューアルは約4年ぶりであった。日本語サイトのリニューアルは年度末であったため資料請求者数への影響は無かった	近年、教会教職3年次編入生の数が減じているため、ウェブサイトのトップ画面からの入口をより分かりやすく改良する		

2 学生募集	6	入学者定員を充たし、収容定員充足を目指す	1年次入学者は、神学科19名、国際キリスト教学専攻12名、キリスト教福祉学専攻0名、ACTS-ES(2019秋)3名で合計34名。編入学者は神学科3年次編入8名、ACTS-ES2年次編入1名で合計9名	1年次は学部定員33名を満たしており、神学科と国際キリスト教学専攻が大きく伸びた。キリスト教福祉学専攻は0名であったが、次年度から募集停止のため欠員募集も実施しなかった。編入は神学科3年次編入定員14名に満たず、欠員募集を行ったが出願者はなかった。1年次入学についてはACTS-ESやキリスト教福祉学専攻が例年よりも少ない中、定員を満たすことが出来たことは評価できる。編入は昨年度の10名から減っており課題である	2021年度入学者は学科再編により総合神学科1学科(入学定員33名、神学科3年次編入定員14名)となる。学科再編の新しさと魅力を武器に、入学定員、編入定員を満たすよう学生募集に取り組む
	7	入試制度の適切性を検証し必要に応じて改革を行う	学務会議、教授会を経て、一般選抜を廃止し、総合型選抜と学校推薦型選抜により入試を行うことを決めた。またウェブサイトで新入試制度について公表した	アドミッションセンター、学務会議、教授会などの議論を経て、入試改革を実施したことは評価できる	総合型選抜は新しい方式のため、運用面でよく準備していく
	8	教員・職員それぞれに相応しい訪問を実行する	教員には、新入生所属教会や中高生礼拝への訪問・キャンプでの講師やアピールを依頼した。新入生所属教会2件、中高生礼拝2件、キャンプ訪問24件、その他EAI生教会ツアー2件	新入生所属教会との連絡が牧師不在などの事情で難しく訪問数が少なかった。キャンプ訪問についてはキャンプの開催時期が集中したため訪問数が少なかった	学生の教会的背景が多様になってきており、教会への連絡方法は在学生を介するなど改善をしていく。キャンプ訪問は学生や卒業生にも協力を仰ぎ学校紹介の機会を増やしていく
	9	キリスト教学学校との共同取り組みを推進強化する	キリスト教学学校との共同取り組みは、千葉英和高校の聖書研究サークルとTCU生との交流の1件のみであった。毎年行っていた女子聖学院キリスト教サークルとの交流は日程調整が出来ず、新島学園とのGlobal English Campは新型コロナウイルス感染症対策のため中止となった	キリスト教学学校に積極的に依頼をするが実施数を増やせなかった	引き続きキリスト教学学校との共同取り組みを推進する。高校訪問などを通じて信頼関係の醸成に努める
	10	SNS等を通じて受験生の益となるコミュニケーションを行う	LINE公式アカウントは友だち199、1対1トークは21名。Instagramはフォロワー730	LINE公式アカウントは相談をしやすいツールとして昨年度に続いて良く利用されている。Instagramは着実にフォロワーが増えている	社会的にSNSの有効性は高まっており、本学としても更に力を入れ、効果的な配信の仕方を検討する
	11	ウェブサイトを継続的に改善強化する	11月に英語サイト、3月に日本語サイトをリニューアルした	約4年ぶりに大幅なサイトリニューアルを実施し、よりユーザビリティを高めるための改善を行うことができた	留学生・社会人が情報を得やすくなるようトップ画面に入口を表示させる。特にACTS-ES、シニアコースの変更を伝える工夫を行なう
	12	動画・紙媒体で学生の成長する姿を訴求する	大学報では卒業生インタビューでTCTS卒業生を掲載。受験生用ニュースレターでは10月から学生の証しを配信するようにした	学生の証しを配信し始めてからニュースレターの開封率が約20%上昇した。受験生にとって魅力あるコンテンツだったと評価できる	引き続き学生の証しを配信していく。また大学報をリニューアルし紙面でも学生の姿を訴求する
13	各調査結果を基に広報活動を行う	新入生への聞き取り調査、オープンキャンパスアンケート、学科再編についての学生説明会を実施し学生の意見を聴取した	学科再編について、学生の意見聴取をきめ細やかに実施し、広報物の制作に生かすことができた	引き続き、学生広報スタッフなどの学生の意見を聴く。オンラインでのミーティングを行なう	
3 財務・キャンパス整備	1	資金の収支の改善に向けた施策の立案と実行② 均衡到達年度2023年度、2019年度収支マックス額26百万円未満。教育活動資金収支差額をマイナス25百万円未満	学科再編案を財務的視点からも検討、学科再編は届出で行なうこととなった。教員免許課程(宗教)設置検討は別の機会を待つこととした。神プロⅢ群を中心に収入・支出の主な項目について検討した。昨年11月に決定の第二回補正予算では、資金収支差額がマイナス1億1,500万円、教育活動収支差額がマイナス2億400万円、期末保有資金額が15億73百万円だったが、実際はそれぞれマイナス96百万円、1億85百万円、15億90百万円となった	第二回補正予算の数値より良かったものの、当初計画とは乖離が大きく、大変厳しい結果となった	引き続き2023年度の資金の収支均衡に向け改善を重ねる。新しい学科の学生募集、寄付金募集の取組みとともに、資金流出を防ぐ方策をさらに検討し実行する
	2	学納金収入2億3,400万円(現員数215名分に相当)を目指す。適切な学納金の設定について改めて検討する	決算結果は1億8千8百万円で、計画に対し△4,593万円である。学科再編後の学納金について検討を進め、1月の理事会で決定した	(学生募集についてはⅡ-6参照)	(学生募集についてはⅡ-6参照)
	3	寄付金収入8,000万円を目指す	当年度から次年度にかけて2年間で30周年記念募金期間として、予算達成を目指した。寄付金額は7,145万円〔予算対比(目標達成率)89.3%、昨年度対比114.5%〕となった	未達となったが、昨年度の金額を上回り、7,000万円を越えたことは評価できる。献金者数の目標としてきた1,200を初めて達成し、次年度は目標を1300とした	新型コロナウイルス感染拡大により、募金の機運にも影響が及ぶことを懸念している。30周年記念募金訴求の今後の展開を工夫する
	4	目標達成に向けた計画の2年目として、人件費依存率171.4%を目指す	決算結果で199.0%となった	人件費は予算を下回っており、学納金が減少した影響が大きい	学納金収入の増加に取り組む。人件費については中長期的計画を精査し、適切性を高める

3 財務・キャンパス整備	5	保有資金額18億円に達していない場合、賞与の減額を検討する	保有資金額は年度当初で既に16億円台であり、年度内に劇的な好転はなかった。慎重な議論を踏まえて、理事会で夏期・冬期を減額（各1ヶ月分→各0.75ヶ月分）して支給することを決定、実施した。賞与復活以来、初めての減額となった	減額を実行した分、経費は削減された。一方、教職員のモチベーションに関わり、課題がある	人件費見直しの根本的な解決に向け、2020年度は、「神の国に仕えるプロジェクト」の第二次策定に合わせ、賞与も含めた人件費の中長期的な検討を進める
	6	奨学金の3,500万円以下の支出を実行する	予算4,805万円に対して、大学負担分支出の目標を3,500万円以下としてきた。結果は、実績総額3,534万円、内大学負担分2,680万円となった	予算に対して、次善策の目標を立てて取り組み、総額では若干越えたものの、ほぼ実行できたことは評価できる	学生支援に支障が出ないように配慮しつつ、効果的な支出抑制を続ける
	7	付随事業及び将来の収益事業の検討を行う	神プロⅢ群で、収入・支出の主な項目について検討する際に、「付随事業及び将来の収益事業」のチームを作り、特に寮と講習会の収支に焦点を当て検討した。また、学校法人として可能な収益事業を確認した	その後の検討は具体的に進まなかった	継続して検討を行なう
	8	30周年に向けた施設設備計画を検討する。食堂及び寮施設改善の可能性について検討を開始する	30周年プロジェクトチームで、食堂・寮の改修とチャペル冷暖房設備新設の計画起案を行なった。冷暖房設備設置は補正予算に計上し、3月に工事を完了した。食堂・寮の改修は、2020年度の当初予算に計上した	チャペル冷暖房設備新設は年度内に完了、食堂・寮の改修は2020年度の当初予算に計上となり、着実に進められた	食堂・寮の改修は、新型コロナウイルス感染症対策のため、国内の動向を注視しつつ行なう
	9	カリキュラム改編に対応したウェブシステムを検討する	I. 教育・学生支援 25 参照	I. 教育・学生支援 25 参照	I. 教育・学生支援 25 参照
4 ガバナンスとマネジメント	1	コンセプト・人間像の浸透状況を踏まえて、教職員像・理事像の明文化検討を開始する	検討を開始できなかった	重点課題であり、検討を開始できていない点は課題である	検討責任者を決定し、検討を開始する
	2	適切な学生支援を実施するとともに、よりふさわしい支援体制の検討を進める	サードカルチャーキッズの新生が目立ったため、専門家を招いて研修を行い、教職協働体制で個別の課題にむけて学生支援を行った	学習障がいやサードカルチャーキッズの課題への具体的な対応は十分とは言えない	継続して専門知識を得た上で有効な学生支援を教職協働で進める。また、教職協働の目指す方向性について検討を進めることで、協働を深化させる
	3	PDCAサイクルの有効化に努めるとともに、よりふさわしいあり方を検討する	新たなPDCAサイクルを導入して2年目、大学運営会議の下に内部質保証小委員会が始動し、活動を本格化した	内部質保証小委員会が活動を行なったことは評価できる	小委員会の活動を今後の評価事業につなげていく。メンバー内の退職者があったため、人員配置について検討する
	4	内部質保証体制について、教職員研修を実施し、ロードマップの作成を行う	個別の外部研修参加はあるものの、学内での全体への研修、またロードマップの作成は未実施である	小委員会は活動を行なっているが、全体への研修が実施できておらず、課題がある	全体への研修の実施を検討する。ロードマップは、次回自己点検・自己評価に照準を当て、その先までを見据え作成を目指す
	5	再編した大学運営会議及び常任理事会の機能向上の取り組みを継続する。学務会議及び教授会の役割分担や審議事項について検討を進める	大学運営会議の運営の工夫、常任理事会はメンバーの交代がありそれぞれ機能向上に取り組んだ。改廃条項の整理を行ない、多くを教授会決済から学長・理事長・大学運営会議決裁とした	諸規程の整理を行なったことは評価できる。各会議の審議事項の見直しはますます進める必要がある	大学運営会議と常任理事会とのすみ分けや、学務会議と教授会の位置付けの明確化を行う
	6	会議決定事項の情報共有を積極的に行うとともに、情報共有ルールを明確化し、共有しやすいシステム整備を推進する	大学運営会議や学科再編プロジェクト会議の決定内容や会議資料は積極的に情報共有されるようになった	共有化が進んでいるが、多くを特定の職員の労に負っており、ルール化・システム化に課題がある	継続課題である情報共有ルールの明確化・共有しやすいシステム整備の推進を図ると共に、業務に活かしやすい情報提供の内容を検討する
	7	ロゴマーク等を有効に活用する。コンセプトのスピリットについて、年間祈祷課題や教職員プロジェクト会議等を通じて不断に確認する	コンセプトロゴに加え、30周年のロゴを制作し活用した。名刺、Tシャツ、支援会グッズ、シオン祭フォトブース等による浸透を図った	ロゴの活用が進んでおり評価できる。広報物デザインの充実も進められた	大学改革に、コンセプトをより鮮明に反映できるよう考慮していく。コンセプトのスピリットを、継続的に教職員で確認する
	8	大学運営会議が主体となり推進する。30周年記念行事は当年度シオン祭の時期から開始する	中期計画・神プロは大学運営会議が、30周年は学長を中心としたプロジェクトチームが推進した	責任主体が明確となり推進したことは評価できる	30周年を迎え、記念事業を推進するため、各部署に協力を求める。新型コロナウイルス感染症対策など不慮の事態だが、ふさわしく推進する
	9	職務権限の明文化に着手する	職務内容の大枠は明確だが、明文化に着手できなかった	前回の自己点検・自己評価から課題が継続している	検討責任者を決定し、検討を開始する
	10	(1教育・学生支援 4「セルグループの実施方法を検討する」の項目を参照して検討)	I. 教育・学生支援 4 参照	I. 教育・学生支援 4 参照	I. 教育・学生支援 4 参照
	11	会議ルールを明確化する。効率的な会議についての研修を企画する	大学運営会議や教授会を初め、準備・運営を通して、論点を明確にし、より効率的に審議が進むよう心がけた。資料の事前配付・報告事項の簡潔化・ペーパーレス化が定着した。組織的な研修は実施できなかった	会議運営の効率化を心掛けていることは評価できる。その方向性を全体で共有するためにも研修が必要であり、課題である	組織的な研修を企画し、会議体としてスキルアップを目指す

4 ガバナンスとマネジメント	12	教授会審議内容を見直す	規程の改廃条項について、決済を大学運営会議・学務会議・学長に移行した	審議内容の検討は継続している	続けて検討を行い、着手できるところから実施する
	13	実施計画に基づきFD・SDを実施する	教職員研修会 (8/23)、ファカルティフォーラム (6/4, 1/7)、精神ケア会 (3/19) 等、計画に基づき実施した	計画に基づき実施できたことは評価できる	引き続き、計画に基づき実施する
	14	新体制の常任理事会・理事会として機能向上の取り組みを継続する	討議中心の理事会の開催を継続した	討議中心の理事会開催を継続したことは評価できる	担当理事制度を充実させる等、機能向上の取り組みを継続する
	15	監事との懇談会を実施する。監事の補佐体制の今後について検討し、監査体制の充実を図る	監事との懇談会を、中間業務監査に合わせて実施した。私立学校法改正に合わせ、寄附行為を変更し、監事機能を強化した	懇談会の実施は評価できる	寄附行為変更による監事機能強化について、実質化を意識的に進める。監事の役割と、監事の補佐体制を今一度確認し、監査体制の充実を図る。懇談会も活用する
	16	情報共有ルールの明確化を含めた総合的な検討を進める	IV. ガバナンスとマネジメント 6 参照	IV. ガバナンスとマネジメント 6 参照	IV. ガバナンスとマネジメント 6 参照
	17	内部質保証推進組織としての自己点検・自己評価委員会と大学運営会議との位置付けをより明確にする。2015年度認証評価の「改善報告書」を大学基準協会に提出する (7月)	自己点検・自己評価委員会と大学運営会議 (内部質保証推進組織) の位置付け、それぞれの役割を明確にした。2015年度認証評価の「改善報告書」を大学基準協会に提出し (7月)、「改善報告書に対する検討結果」を受領した	認証評価から一定の改善を行ない、「改善報告書」を提出できたことは評価できる	大学運営会議・内部質保証小委員会と、自己点検自己評価委員会との役割分担について検討を進め、内部質保証活動をより実質化していく
5 研究	1	①専任教員の3割の外部研究費への申請 (もしくは継続課題採択) ②研究支援センターによる外部研究費関連の情報共有、申請の促進	①専任教員による外部研究費の採択2件、申請1件があった ②説明会、掲示、学内イントラネット、メール等で情報共有を行なった	①採択課題2件及び新規申請1件の計3件 (専任教員の15%) があり、目標には届かなかった また非常勤教員による申請が2件あった (いずれも不採択)	①研修会・ウェブサイトによる情報共有等に力を入れ、外部研究費の申請・獲得を促進していく。申請を予定しているが、学内業務のため見送った教員が複数おり、次年度の申請に向けてサポートを行なう
	2	①研究支援センターを中心とした研究支援体制の充実をはかる ②研究支援センター専用ウェブサイトの開設と情報共有の促進	①学内・学外研究費に関する支援を研究支援チームにより行なった ②事務部門が2名によるチーム体制となり、支援業務の充実を図ることができたが、当初予定していた人員補充と業務分担の変更ができず、ウェブサイト開設は次年度に見送った	特になし	ウェブサイトの開設を実施すると共に、必要人員の補充を求める
	3	①キリスト教葬制文化研究会を継続し、キリスト教葬儀に関わる人材育成プログラムの作成を行う ②神の国研究プロジェクト (共立基督教研究所：N・T・ライトと「キリスト教の公共性」研究会・賀川豊彦シンポジウム、その他) を継続	①キリスト教葬制文化セミナーを計画通り実施し、キリスト教葬儀ディレクター育成のためのテキスト作りを開始した ②N・T・ライト研究会、N・T・ライトと「キリスト教の公共性」研究会、キリスト教と福祉研究会を開催した	①キリスト教葬儀ディレクター育成の要望が高いことは評価できる ②計画していた2つの研究会と、研究助成採択課題による研究会1つを加えて、充実した活動となったことは評価できる	①テキスト作りを2020年度に完成させ、講座を設ける
	4	日本宣教学会、アジア宣教学会、ATA加盟校の宣教研究所との情報交換等を開始する	日本宣教学会との宣教の課題や情報交換は行なわれたが、アジア神学協議会 (ATA) 加盟校とは個人的なレベルに留まった	日本宣教学会との連携は行なわれたことは評価できるが、他団体との情報交換が開始できなかったことは課題である	ATA加盟校の宣教研究所を担う人との接触を増やし、また、アジア宣教学会の宣教研究会議に参加する
	5	研究支援センターを中心に促進をはかる	市民の協同による地域づくりを考える企画として、「ワーカーズ被災地に起つ」上映とパネル・ディスカッションを本学にて開催した (本学公共福祉研究センターとワーカーズコープ・センター事業団東関東事業本部の共催)	継続してきた公共福祉分野の成果として地域との実践的な連携の機会をもてたことは評価できる	2021年度より開始の新しい教育課程とも連動しつつ、可能な活動を検討する。今後も学術関連活動の実施と受け入れの機会を設ける
	6	紀要30周年記念号、30周年記念誌を発行する	・紀要30号を刊行し、30周年のテーマに係る論文・翻訳等5件を掲載した ・30周年記念誌についてはVII-7を参照	・寄稿が限られ、当初予定していた特集を実現することができなかったが、関連論文・翻訳5件を含み、30周年を記念する内容となったことは評価できる ・30周年記念誌についてはVII-7を参照	特になし
	7	「信徒の神学」についてFCCと共立で合同研究を検討していく	「信徒の神学」研究会の立ち上げ、2020年度からの開催を決定した	計画通り研究会の立ち上げを行なった	特になし

6 教会と地域とともに	1	学内推進体制を強化し、方針の浸透を図る	社会連携方針を改正した。また、社会連携推進会議を開催し、意見交換を行なった	学内組織を横断する形で推進会議を開催できたことは評価できる	推進会議を中心に、方針の浸透・推進を図る
	2	実務者研修を実施する	受講生は学外者6名(学内者なし)だった。井上先生をメンバーに加えてスクーリングを実施した。次年度に向け市内の福祉施設を訪問し、印西市と周辺の福祉施設にパンフレット郵送、Fax広報を行なった	学内への周知が足りなかった。地域新聞などへの広告掲載は広く一般に周知する点で継続する。市内の福祉施設30か所を訪問し、実務者研修を自前や提携した学校と実施している施設が判明した	30周年記念特価の学内向けコースの実施を予定し、年度内に周知を開始した。自前または提携で実務者研修を未実施の施設訪問、Fax広報の活用に努める。福祉実習の施設との関係を密にする工夫をする
	3	地域に開かれたコンサートを運営する	5月18日に第19回「パイプオルガンさん こんにちは」を開催し、近年では最高の380名の参加者であった。12月13日にクリスマスコンサートを開催し、来場者は580名であった	クリスマスコンサートは、初めて印西市民アカデミーの講座とされ、同アカデミーから約30名の参加があり、さらに地域に開かれたコンサートとなった	運営について準備の段階から教員がより関わるようになった。今後も安全面に配慮したより良いコンサートの運営のため検討を続ける
	4	市民団体等と協力し地域の国際交流を推進する	印西国際交流協会との連携を強めた。留学生も短期留学生も、幼稚園・学校・教会・その他の団体にグループで訪問した	近隣の様々な団体との交流をもつ機会が増えた	訪問先の諸団体のイベント・希望・ニーズについての情報を集め、定期的に学生に伝達する
	5	30周年と連動した活動を目指す	①地区支援会活動、シオン祭を初めキャンパスにてTCU30周年をアピール(マグカップキャンペーン等) ②30周年記念マグカップ、ボールペンを作成 ③30周年記念募金パンフレット作成し、9月より本格的に募集を開始、クリスマス時期も活用。企業向けの趣意書を作成 ④同窓会との連携強化を図り、卒業生名簿作成、行事の協力開催を実施	寄付金額が7,145万円(目標達成率89.3%、昨年度対比114.5%)。献金者数1,228(目標達成率102.6%、昨年度対比119.2%)となった。献金者数の目標としてきた1,200を初めて達成したこと、昨年度対比がいずれも越えたことは評価できる。地区支援会は、神奈川・町田地区やアメリカでの活動が新たに進められ、全22カ所となったことが評価できる	例年3月に実施している「支援会全国会議」が新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、実施延期を余儀なくされた。30周年を機会とした更なる結束を意図していたため、30周年記念募金訴求を含めた今後の展開を工夫する
	6	支援教会・支援団体を拡大する	支援団体には、新たに日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団が加わった(3月24日理事会承認)。また、30周年を機に、関係をより深めていくことと学科再編の説明のため、既存の団体・教会を訪問することを支援団体から派遣されている評議員に依頼した	新たに支援団体が加わった事、既存の支援団体・教会へのコンタクトは評価できる	30周年を機に、更なる拡大を視野に入れて団体との協議を継続する
	7	エクステンションを通して、教会の必要に応える	教会と連携したエクステンションを2件開催した	地域教会と継続した連携を実施していることは評価できる。次年度も継続予定である	特になし
	8	ケアチャーチを実施し、教会の福祉への関心を広める	7月19日「スピリチュアルケアと音楽」をTCUを会場に実施した(参加者13名)。2月29日開催予定だったセミナーは新型コロナウイルス感染症対策のため中止となった	7月のセミナーは、平日の開催ということもあり参加者が少なかったが、CGNTVで当日の様子が放映、SNS上でのシェアにより、教会関係者への発信ができたこと、夏期教会音楽講習会との共催により同講習会参加者約40名も一部受講できたことは評価できる	より多くの人が参加できるよう日程と場所を検討する
	9	実践神学分野における継続教育を継続する。教会音楽分野において、講習会や公開講座を用いて継続教育を充実させる	〈実践神学分野〉外部向けに4回開催した教職特別セミナーは、卒業生の継続教育に相応しい内容だった 〈教会音楽分野〉夏期教会音楽講習会では、参加者42名中10名の卒業生の参加があった。公開講座は第1回41名、第2回32名、第3回1名、第4回5名、第5回2名の参加者があった。卒業生は第1回7名、第2回5名、第3回1名、第4回5名、第5回2名であり、継続教育としての役割を果たしている	〈実践神学分野〉セミナーへの卒業生の参加増加を図るため、お試し版でオンライン受講を行い、参加が増加したことは評価できる 〈教会音楽分野〉講習会への更なる参加者の増加を検討し、昨年度より受講料を値下げしたが、受講料収入は増加したことは評価できる	〈実践神学分野〉セミナーへの卒業生の参加増加を図るため、オンラインシステムの整備をしていく 〈教会音楽分野〉より多くの方に参加してもらうためチラシの送付範囲を再度検討していく
	10	支援団体への貸出しを促す。規程を整備する	〈総務〉日本同盟基督教団千葉宣教区が5回、同教団の教会が1回施設を利用した。また、同教団千葉宣教区、日本基督教団、市民クリスマス実行委員会、結婚式(2件)でチャペル等の施設を利用した。特別割引料金は規程が整備されており、①支援団体割引 ②支援団体以外の教会団体割引 ③同窓会割引を適用している 〈FCC〉規程の改正、貸出のための内規の検討を行なった	〈総務〉主に日本同盟基督教団千葉宣教区の施設利用がある。同教団以外の支援団体による貸出について、貸出日の内部対応を考慮しつつ、引き続きウェブサイト等で周知し、貸出を促すことを検討する 〈FCC〉規程の改正、貸出のための内規の検討を行うことができたが、決定には至らなかった。次年度に整備する	〈総務〉今年度は、教研棟1階中教室3のエアコン更新工事、チャペル内空調新設及び内装改修工事を実施した。今後、施設使用料に関して、電気代も含めて施設利用料金表の見直しを検討する 〈FCC〉規程の改正、貸出のための内規の検討案を、今後総務課と調整の上決定する
	11	まず学内ボランティアを推進する	教職員・学生対象のボランティア(清掃)を2回企画・実施した	実施できたことは評価できる	次年度も継続する

7 30 周年 記念 事業	1	コンセプト「Stand in the Gap 破れ口にキリストの平和を」に基づくブランディングを行う	10月14日シオン祭での30周年キックオフイベントにおいてコンセプトを前面に打ち出してキャンペーンを行った。2021年度の学科再編を30周年やコンセプトと関連付けて広報し各メディアでも報じられた	コンセプトは学内外に浸透しつつある。2021年度の学科再編を30周年やコンセプトに関連付けて発表し各メディアで報じられたことは大きな成果であった	2020年11月3日の創立記念日に向けてブランディングを強化する。コンセプトへの共感を生む施策を検討し実施する
	2	教職員、学生・卒業生、教会、支援者、地域との連帯と共同の深化・拡大を図る。参加型の企画をする	10月14日シオン祭での30周年キックオフイベントを学生の準備委員と共に企画した。10/30創立記念日には同窓会の協力を得ることができた	学生と卒業生の賛同と協力を得て30周年記念事業をスタートすることができた	教会、支援者、地域との連帯をどのように進めるか具体的に検討していく
	3	施設のリニューアルを企画する。食堂・寮に焦点を当てる	チャペル冷暖房設置工事が完了し、食堂のWi-Fi工事が完了した。寮と食堂の改修工事については、学生の寮運営委員会と複数回の会議を持った	チャペル冷暖房設置工事を滞りなく終わることができた。また、寮と食堂の改修工事について学生と複数回の会議を持ち、コミュニケーションを取りながら協働することができた	寮と食堂の改修工事について、学生とのコミュニケーションをさらに密にしていく。夏の着工に向けて学生の満足度が高まることを目指して準備する
	4	期間を2019年シオン祭から2020年創立記念日とする	シオン祭をキックオフイベントとして実施。記念事業パンフレットを作成し卒業生・教会等に送付した	2019年シオン祭から順調にスタートを切ることができた。その後も各種イベントを30周年と関連付けて実施することができた	継続的に30周年を訴求する機会を計画する
	5	年間行事・活動を活かす	10/14シオン祭、10/30創立記念行事を30周年行事と位置付けた。地区支援会の学園デー、公開講座、エクステンション、音楽行事も30周年と関連付けて実施した	2019年シオン祭から順調にスタートを切ることができた。その後も各種イベントを30周年と関連付けて実施することができた	継続的に30周年を訴求する機会を計画する
	6	記念募金を企画する	2019年4月1日より、目標を2年間で1億6500万円に定め、募金を開始している	30周年記念募金を始めることができ、大口寄付も受けることができた	目標金額に向けて更なる寄付金を募るための施策を支援センター会議において検討する
	7	記念発行物を作成する	記念誌作成委員会が発足し2021年春発行を目指して準備が始まった。30周年記念の紀要を発行した	記念誌作成委員会によって計画的に準備が進められている。紀要を発行することができた	宣言、歴史小冊子について具体的な準備を進める
	8	継続的な事業活動の契機となる企画をする	学科再編の実行と認知を30周年事業の最重要課題と位置づけ学生、関係教会・団体、メディアへの説明と対話の機会を積極的に設けた	学科再編について学内外から概ね良い評価・評判を得ることができた	学科再編についてより具体的な内容を発信し、TCUが目指している教育への共感を得、学生募集や寄付につながることを目指す
	9	TCUの目指すところを言葉化する「宣言文」を検討する	理事長・学長を中心として準備を進めている	宣言文のたたき台を作るまでには至らなかったが、多方面から学科再編についての意見を聴くことができた	学科再編を機に寄せられた多様な意見を参考にし宣言文を完成させる